

R.ローティと W.ホイットマンにおける「詩人」の概念をめぐる

立正大学 倉形一樹

序

私たちの多くは、今日よりも明日が、そして想像もしえないほどさらに遠くの日々が、いずれにしてもよりよいものになることを願っている。ほとんど祈りにも近いこの願いは、たしかに私たちの無力さを示唆するものなのかもしれない。けれども、人類はこれまで途方も無い時間をかけて数多の進歩を遂げてきた。その進歩は、私たち人間の努力によって成し遂げられてきたものである。未来は完全に予測できるものではないが、それは、私たちの努力によって創りあげていくことができるものである。

リチャード・ローティ(1931-2007)は、人間の歴史をメタファーの歴史としてみなし、彼の言う「詩人」こそが人類の進歩に多大な貢献をしてきたと主張している。彼における「詩人」の定義は、「事柄を一新する人」(CIS,12-13/三一)である。一方で、ウォルト・ホイットマン(1819-1892)は、民主主義の幕開けこそが人類の進歩の輝かしい一歩目であるとみなしていた。彼は、アメリカ合衆国を「最大の詩編」として捉え、民主主義を活性化させるのは「詩人」だと考えていた。彼によれば、「詩人」は「強固な結束と道徳的な一体性をもたらす」(DV,9)人物である。両者の思想に共通する点は、まさに「詩人」の創造する「言語」が「進歩」を引き起こすとみなしている点にあり、この点にこそ、人類の進歩をめぐる新たな切り口が提示されていると言えよう。

したがって、本論文の目的は、第一に、ローティがホイットマンに対して記述した「詩の闘争」の意味内容を明らかにすることで、彼らにおける「詩人」の概念の内的な連関を詳述し、人類の進歩をめぐる彼らの思想の意義を示すことである⁽¹⁾。先行研究では、ローティの政治的見解に関する基本的な注意が払われているのみであり、彼らをめぐる内的な連関については十分に解明されていない。第二に、彼らの思想に共通する視点において「私たち」という視点を取り残されてしまっていることを指摘し、人類の進歩を引き起こす人物としての「私たち」を恢復することをその目的とする。

本論文の流れは、次のとおりである。第一節では、ローティにおけるメタファー論を論じることによって「詩人」の役割とその意義を明らかにする。第二節では、ローティの依拠したデイヴィッド・レイノルズ(1952-)によるホイットマンの「詩人」の概念を明らかにし、「詩の闘争」の意味内容を解明する。第三節では、人類の進歩に寄与する「詩人」のイメージに「私たち」が不在であることを指摘し、「私たち」を恢復することを試みる。

第一節. 〈人類という種の前衛〉としての「詩人」

本節では、ローティにおける「詩人(poet)」の概念を明らかにするにあたり、「メタファー(metaphor)」について論じる。なぜなら、「詩人」はそれらを生み出す人物として描かれているためである。

ローティは、「信念と願望の織物が織り直さざるをえなくなる場合、その新たな信念を加えるものに、三つのものがある」(EHP,12)と言う。それは、「知覚、推論、メタファーである」(ibid.)。しかし、「知覚」と「推論」には、「言語」を変える働きがない。彼によれば、「それらは文の真理値を変更するが、私たちの文のレパトリーを変更するものではない」(ibid.)からである。もし私たちの信念と関わっているものが「知覚」と「推論」しかありえないと仮定するならば、それは、「私たちが今話している言語は言わば存在する言

語のすべてであり、私たちに必要な言語のすべてであると決めてかかること」(ibid.)になる。しかしながら、

メタファーを信念の第三の源泉と見、それゆえ私たちの信念と願望の網目を織り直す第三の動機と見ることは、言語や論理空間、可能性の領野を、変更可能なものと見ることである。それは、思考の目的は神の目からの眺めを得ることであるという考えを、放棄することである。(ibid.)

すなわち、「メタファー」は、私たちの信念と願望の網目を織り直すだけでなく、私たちの「言語」や「論理空間」、「可能性の領野」を変更させるものである。「メタファー」は、「新たなわけのわからない言葉」(EHP,19)であり、「言わば、論理空間の外からの声である。それは、[...]自分の言語や生活を変えよという要請である」(EHP,12)。「メタファー」が「自分の言語や生活を変え」る可能性をうちに含む理由は、それが私たちに驚きを与え、私たちは「その驚きを処理するのに役立つ可能性のある[すでに手にしている]理論の修正」(ORT,167)を試みることで、それを解釈するためである。それは、たとえば「背筋を震わせる詩の断片」であり、「無限に反響し、自己や行動パターンを変える」役割を持っている(ORT,163)⁽²⁾。「メタファー」が人びとに受け入れられるとは、それが「死んだメタファー」(EHP,17)として、言い換えれば、「馴染みのある言葉」(CIS,18/四一)として私たちの社会的実践のうちで使用されるようになったということである。

したがって、「スリリングなほど生き生きとしたメタファーに対するしかるべき敬意の払い方とは、できるだけ早く死んだメタファーになるように手助けし、それらの地位を社会の進歩の道具という地位に早急に引き下げることである」(EHP,17)。すなわち、私たちの「言語」や「論理空間」、「可能性の領野」が変更される可能性は、「メタファー」を「馴染みのある言葉」にしていくことによって達成される。それゆえ、彼は「メタファー」を「社会の進歩の道具」としてみなすのである。

ローティは、『偶然性・アイロニー・連帯 (Contingency, Irony, and Solidarity)』において、こうした「メタファー」を創造する言語使用者を「詩人」として定義した。彼らは「事柄を一新する人 (one who makes things new)」(CIS,12-13/三一)である。ローティ自身はここで「ガリレオ、イエイツまたはヘーゲルといった人」(ibid.)として定義しているが、バーンスタインによれば、ローティにおける広義の意味の「詩人」は、プルート、ナボコフ、ニュートン、ダーウィン、ヘーゲル、ハイデッガーが挙げられるという (Bernstein 1990,44)。ローティによれば、彼ら「詩人」は新たなパラダイムを形成した人物であり、「想像力豊かな天才」(PCP,84/一〇九,114)である。たとえば、ヘーゲルは「精神」や「弁証法」を持ち込むことで、カント的な二元論に関する問題を解消した。ガリレオは、力学の基礎を築きあげることで、アリストテレスの自然学に関する問題を解消した。彼らは、「古い二つの語彙がどのようにすれば互いにうまく適合するのか」という「旧来の語彙の中で定式化された前提」ではなく、「新しい第三の語彙」を使用した、すなわち「メタファー」を使用した人物である (CIS,12/三〇)。そして、ローティは人間の歴史をこうした「メタファー」による再記述の歴史になぞらえることで、「詩人」を次のように定義する。

次から次へと取って代わられるメタファーの歴史として人間の歴史を考

えてみるならば、私たちは詩人を、新しい言葉をつくる人、新しい言語を形成する人の総称という意味で、人類という種の前衛（the vanguard of the species）だとみなすことができるのである。（CIS,20/四五）

第二節．〈来たるべき詩人〉としての「詩人」

本節では、ホイットマンにおける「詩人」の概念および「詩の闘争」の意味内容を明らかにする。ローティはレイノルズの議論を踏まえてホイットマンを「詩の闘争」を求めた人物として記述しており、彼からホイットマンの「詩人」の概念を理解している。以下では、先ずローティによるホイットマンへの記述を扱い、その後にレイノルズの見解を論じていく。

ホイットマンによれば、「アメリカ合衆国そのものが、本質的には最大の詩編（greatest poem）」（LG,5/七=AOC,22/二三）なのであるが、ここでローティは、ホイットマンを次のような人物としてみなしている。「ホイットマンは、人間の生活のオルタナティブな形式間の競合と議論を求めた——それは、相克する耳ざわりな不協和音が、以前には聴いたこともない新たな和音において解消されるような詩の闘争（poetic agon）である」（AOC,24/二六）。ここで重要なのは、その直後にヘーゲルについて記述している点である。

その「進歩的進化（progressive evolution）」というヘーゲル的な考えは、19世紀の政治的および社会的思考へ大きな貢献をなしたが、そうした考えは、すべての人が他のすべての人と互いに対立させられるというものである。[...]ヘーゲル的な希望は、そのような闘争の結果として新しい文化が生まれることであり、この新しい文化は、それが統合したどの文化よりも優れている。この新しい文化は、統一の中により多くの多様性を含むために優れているのである。（AOC,25/二六・二七〔強調点筆者〕）

ローティは、こうしたヘーゲル解釈と彼自身のメタファー論を混ぜ合わせ、ホイットマンを「詩の闘争」を求めた人物として記述している。こうしたヘーゲル解釈について、ローティはレイノルズの見解に依拠しており（AOC,143/一五九）、ホイットマンにおける「進歩」をめぐる概念として理解しているのである⁽³⁾。そのため、以下でレイノルズによるホイットマンの「詩人」の概念を詳述する。

レイノルズによれば、ホイットマンは『民主主義の展望（Democratic Vistas）』の最終版となるエッセイを改訂しているなか、当時の政権の腐敗を思い、ほとんど窒息しそうであったという（Reynolds 1996,480）。「戦争がアメリカの生活を浄化するという、想定された役割を果たさなかったことを理解し」、それら二つの事柄に引き裂かれたホイットマンは、「希望を未来に向けた」（ibid.）。彼は「シニシズムに向かう圧力にも関わらず、戦後、新たなオプティミズムの源を得た。それは「進歩的進化」と呼ばれるもので、ポスト・ダーウィンの思想と、ヘーゲル主義の理想主義との結合であった」（ibid.）。すなわち、ローティの用いた「進歩的進化」というレイノルズによる造語は、ヘーゲル主義が「進歩的（progressive）」として、ポスト・ダーウィン⁽⁴⁾の思想が「進化（evolution）」として表現されたものである。

ホイットマンの共感を呼び、慰めをもたらしたヘーゲルの弁証法の定式（1.テーゼ、2.アンチテーゼ、3.ジンテーゼ）⁽⁵⁾は、『民主主義の展望』において二つの理論として適用された（ibid.）。ホイットマンの一つ目の理論は、1.「民

主義」(大衆社会)、2.「個人主義」(個人)、3.「球状の文学(orbic literature)」(未来のすべてを解決する文学作品)である。二つ目に、1.民主主義の政治プログラムの腐敗と矛盾、2.貪欲と物質主義に汚されている現代アメリカの物質的富、繁栄、および労働節約のための機械、3.「過去のそれらのものから上昇し、それらすべてを輝かしいものにする、来たるべき独創的な作家と詩人の表現精神」である(Reynolds 1996,481)。このジンテーゼに相当するものとして、実際にホイットマンは次のように述べている。

第三段階は、過去のそれらのものから上昇し、それらすべてを輝かしいものにするために生まれるものである。それは、自己完結し、他とは異なり、より広範で、より豊かで自由なこれらの州のために、精神と知性を通じて形成される独自の表現精神である。それは、来たるべき独創的な作家や詩人、男性も女性も含む、多くのアメリカの個性によって実現される。(DV,56)

ホイットマンは、ヘーゲルの定式を取り入れることで、最終的に訪れるのが〈来たるべき詩人〉であると主張した。彼は、〈来たるべき詩人〉こそが「すべてを輝かしいものにする」⁽⁶⁾と考えていたのである。

これまでの議論から、「詩の闘争」という記述は以下のように解明される。全文をふたたび引用したい。「ホイットマンは、人間の生活のオルタナティブな形式間の競合と議論を求めた——それは、相克する耳ざわりな不協和音が、以前には聞いたこともない新たな和音において解消されるような詩の闘争である」(AOC,24/二六[強調点筆者])。すなわち、ローティは、「相克する不協和音」(テーゼとアンチテーゼ)を「以前には聞いたこともない新たな和音において解消される」(ジンテーゼ)ものであるところの「闘争」として捉えることで、そのホイットマン＝ヘーゲルの進歩的な精神を表現しようとした。そして、第一節のローティのメタファー論に「詩の闘争」を照らし合わせると、「相克する不協和音」とは、「馴染みのある言葉」や「死んだメタファー」であり、それに対し、「以前には聞いたこともない新たな和音」とは、これまで存在していなかった「新たなメタファー」のことを示していたと解釈できる。したがって、「メタファー」の創造によって古い言葉、つまり「言語」が更新され、そして、それが際限なく繰り返されることで人類の進歩が作り上げられていくということを、ローティは「闘争」という言葉で暗に示していたのである。

第三節.〈英雄的・救世主的な詩人〉から「未来」を創造する「私たち」へ

これまで、「詩の闘争」の意味内容を明らかにするためにローティとホイットマンにおける「詩人」の概念を詳述してきた。彼らにとって「詩人」は、「メタファー」を創造することや「独創的な表現精神」を創造することによって、人類の進歩を促進する重要な役割を持った人物である。彼らの思想は、「詩人」による「言語」の創造が人類の進歩を引き起こすという点、すなわち、「相克する不協和音」が「新たな和音」によって解消されるという進歩観を示した点に意義を持つのである。しかしながら、本節では、彼らの「詩人」の概念がある共通の問題点を孕んでいることを指摘したい。ローティは、人類の進歩が「人類という種の前衛」である「詩人」によって引き起こされると考えており、一方で、ホイットマンは、それが〈来たるべき詩人〉によって引き起こされるとして考えている。彼らはいずれも、「メタファー」を創造

することで人間のよりよい未来を切りひらく人物としての、〈英雄的－救世主的な詩人〉のイメージに信頼を寄せている⁽⁷⁾。問題なのは、その視点に分け入っていくと、そこに私たちが存在していないという点である。すなわち、私たちの手元にある選択肢は、〈英雄的－救世主的な詩人〉による「メタファー」を受け入れるか、もしくはそうしないか、ということのみである。

さらに、これらの議論によってプラグマティズムにとって不都合が生じるのは、コリン・クープマン（1978-）が、プラグマティズムに一貫する改良主義的な信念の定義を表した「よりよい未来は私たちの努力によって現実になる」（Koopman 2006, 107 [強調点筆者]）というスローガンが、その力を失ってしまうということにある。すなわち、これまで描写してきたローティとホイットマンの議論では、よりよい未来を創造する私たちが立ち現れてこないのである。ローティは、「詩人」が創造する「メタファー」によって人類の進歩が引き起こされると考え、ホイットマンは、「詩人」による「独創的な表現精神」の創造こそが人類の進歩を、すなわち民主主義の完成を実現するものであった。両者にとって、「詩人」による創造性こそ「進歩」に不可欠なものである。しかし、人類の進歩は、〈英雄的－救世主的な詩人〉だけが切りひらいてきたのではない。彼らも含めた私たちがよりよい未来を創造してきたし、なおも創造していくと言えなければならない。

ローティとホイットマンは、ヘーゲルやガリレオにみられるようなラディカルなメタファーの創造に重きを置いていた。ヘーゲルやガリレオなどによる再記述としての「メタファー」は、古い問題——「馴染みのある言葉」が対立している状況——を解消し、人類の進歩に寄与したのである。しかしながら、私たちの「言語」と「論理空間」、そして「可能性の領野」は、そうしたラディカルなメタファーによってのみ変ずるというものではない。たとえば、私たちは他者とのふとしたコミュニケーションにおいてでさえも多大な影響を受けることがある。他者の言葉が「私」という存在を造り変えることに十分な理由を与えるのは、それらがたんに喜びや悲しみの感情を引き起こす言葉であるというだけにとどまらず、当人の信念に深く関わる重大な事柄をも含むためである。このことは、言い換えれば、私たちは日々の言語的実践のうちに「言語」や「論理空間」、「可能性の領野」が変更されるという可能性に期待を寄せているということである。

では、私たちの日常的な言語的実践にどのような可能性を見いだせるのだろうか。以下では、ホイットマンの「スラング」に関する議論を起点とし、日常的な言語的実践に焦点を当てることで、切り離されてしまった「私たち」を恢復することを試みたい。

ホイットマンは「スラング (slang)」という言葉に注目し、独自の言語観を築いた。「スラング」は「深く考えると、すべての言葉や文章の背後にある無法な胚芽的要素であり、すべての詩の背後にあるもの」(PP, 1165) である。「無法な胚芽的要素」とは、従来の言語の文法や規範に囚われていないということを示唆し、さらに、「すべての詩の背後にあるもの」とは、「スラング」が詩的な表現を支える言語であるということを示唆している。そして、「言葉の形成過程において、多くの言葉が新しい意味を獲得し、価値のあるもの、不可欠なもの、永遠に生き続けるものとなる」(ibid.) と述べられるように、言葉は常に形成過程の内に曝されている。「スラング」は、こうした言葉の形成過程における「健全な発酵や噴出」である (PP, 1166)。

さらに、ホイットマンによれば、「スラング」は「直接的な表現からの逃避の試みであり」、「過度の文字通りの意味からの脱却である」(ibid.)。その試

みは、「制限のない自己表現を可能にし、最高のレベルでは詩人や詩を生みだ」(ibid.)すのである。では、「スラング」はどのような特徴を持つのだろうか。以下に、その定義をまとめよう。

- (a): 従来の言語の文法や規範に囚われていない
- (b): 詩的な表現を支える
- (c): 直接的な表現からの逃避の試み
- (d): 過度の文字通りの意味からの脱却
- (e): 制限のない自己表現を可能にする

これらの定義は、(d)を除いて、ローティによる「メタファー」の定義ときわめて類似している。しかしながら、「メタファー」の定義に重ね合わせることができず「スラング」の定義に独特であるのは、(d): 過度の文字通りの意味からの脱却、これである。たとえば、cool という語は元来「冷たい」「涼しい」を意味していたが、「スラング」として用いられるようになると、「かっこいい」や「イケてる」を意味するようになった。dope や sick などの語も同様であるが、これらの語は文脈や背景によって意味が変わるものである。他にも、woke という語は、たんに wake の過去形であったものが、人種的な偏見や差別に対する人びとの意識を表明するものとして用いられるようになった「スラング」である。これらは「過度の文字通りの意味からの脱却」の例である。

ローティは『偶然性・アイロニー・連帯』ののちに、「メタファー」をより広義な意味での「新しい言語」として強調した。それは、ラディカルなメタファーの枠組みから離れ、言語の「新たな使い方」にまで「メタファー」の意味を拡張したことを示唆している。「新しい言語」とは、「単に新しい言葉だけでなく、言語の創造的な誤用も含む。すなわち、[それは、] 最初は奇妙な響きをもつ、馴染みのある言葉の新たな使い方である」(FP,6)。先の例に加えて、たとえば、「クィア (Queer)」という言葉は、元来「奇妙な」「普通ではない」という否定的な意味を持っていたが、1980年代以降、当事者のコミュニティ内で再定義され、現在ではポジティブなアイデンティティを表わす言葉として広く使われている。「クィア」は「馴染みのある言葉の新たな使い方」であり、それは「過度の文字通りの意味」から脱却しているために、「最初は奇妙な響きをもつ」だろう。これらの言葉は、私たちが創造した言語である。ローティの「新しい言語」は、この意味でホイットマンによる「スラング」の定義と重ね合わせることができる。私たちは「新しい言語」を手にしたとき、言語的实践においてそれを使用する。その言語が有用な道具としてさらに多くの人びとに受け入れられていくと、「クィア」の例に見るように、それは一つの文化や連帯の形成を可能にする。このように、私たちの「言語」が変化することは、私たちの生のあり方が変化することに等しい。「新しい言語」は、受け渡し、受け渡されることによって、私たちの「論理空間」を広げ、「可能性の領野」を切り開き、人類の進歩を促進するものとなる。

「言語」のこうした側面に立つとき、ホイットマンにとって重要であったのは、フランクが述べるように、「問題は詩そのものではなく、つまり、問題は詩の背後にある主体性」(Flank 2007,420)である。すなわち、ホイットマンにおける「スラング」への注目、人びとの「主体性」と「創造性」に対する信頼を表していると言えるだろう。ホイットマンにとって「進歩」は、人間の精神としての「内部生命と芸術」によって達成される(DV,56-57)。「内部生命」は人びとの「主体性」であり、「芸術」は人びとの詩的な「創造性」

である。ホイットマンは、人びとの「主体性」と「創造性」の発展こそが「進歩」を促進すると考えていた。

最後に、これまでの議論を経たことで、私たちは、晩年のローティが以下のように言ったことを、よりよい未来を現実にするために私たちが努力することのできるものとして、受けとめることができるだろう。

文化政治を進める方法の一つは、言葉の使い方を変えることを提案し、新しい言葉を広めることである。そうすることで、行き詰まりを打破し、会話をもっと実りの多いものにすることである。[...] 私たちの概念が成熟すること、そして概念のレパートリーがますます豊かになっていくことこそが、文化的進歩を作り上げるのである。(PCP,124[強調点筆者])

ホイットマンは、人びとの「主体性」と「創造性」の発展によって人類の進歩が引き起こされると考えていた。ローティによれば、人類の進歩は、私たち自身がどのような言葉を使用するのか、すなわち再記述することのできるのか、ということによって創りあげることのできるものである。それは、ラディカルなメタファーを発明する天才による再記述だけでなく、個人や文化、社会などに対して、私たち自身の手で創造する言語的实践によって、私たちは私たち自身の未来を創りあげることができるということである。

結語

本論文では、ローティとホイットマンにおける「詩人」の概念について論じた。ローティは、ホイットマンを「詩の闘争」を求めた人物として記述した。その記述は、ホイットマンのヘーゲル受容を示唆し、ローティ自身のメタファー論を投影したものであった。本論文では、彼らの「詩人」をめぐる思想が、人類の進歩にとって意義を持つものとして明らかにしてきた。しかし、両者における「進歩」の概念が主として〈英雄的-救世主的な詩人〉による創造性に依拠していたことを踏まえて、本論文では、ホイットマンの「スラング」の見解を中心に検討し、また、後年のローティの「メタファー」の概念の推移を論じることによって、取り残されていた「私たち」の視点を恢復しようと試みた。

ローティとホイットマンが考えたように、たしかに、人類の進歩は〈英雄的-救世主的な詩人〉の「創造性」にその多くが担われている。私たちは、彼らの「言語」が切り開く道を歩むことができる。しかし、私たちもまた、自ら「言語」を創造することができる。すなわち、私たちの言語的实践、ローティの謂を借りれば、「会話をもっと実りの多いものにすること」や「新しい言葉を広めること」における、私たちの「主体性」と「創造性」もまた、人類の進歩についての重大な役割を担っているのである。そして、私たちがどのような進歩を遂げることができるのか、言い換えれば、私たちがどのような未来を創造することができるのかということに関わっている。そうした再記述の努力、すなわち、世界にこだまする不協和音を新たな和音へと転調させようとする私たちの努力が、よりよい未来⁽⁸⁾を創造する。私たちの奏でる和音が現在に響みて、その反響の先々にまた新たな和音が奏でられ、そして、幾重にも織りなされる残響の彼方こそが、私たちの創造する未来の彼方なのである。

「よりよい未来は私たちの努力によって現実になる」というコープマンに

よる改良主義のスローガンは、プラグマティズムを実践的な哲学として扱うことの表明である。この改良主義の信念が主としてローティにおいてどのように見いだされ、またどのように活用されるのかは、ローティ思想の基調低音としての「希望」の概念との関わりにおいて検討したい。人類の進歩、すなわち、「今日よりも明日が、そして想像もしえないほどさらに遠くの日々がよりよいものになること」こそが「希望」である。しかし、こうした課題には機を改めて取り組みたい。

注

- (1) ローティは、『哲学と社会的希望 (Philosophy and Social Hope)』(1999年)において、ホイットマンの「人間の未来」という概念を再解釈するかたちで踏襲しているため、それ以降のホイットマンによる思想的な影響を指摘することができる。一方で、ローティがホイットマンについて最初に論じた文献は、1988年の論文“Unger, Castoriadis, and the romance of a national future”においてであるが、本論文第一章が主に依拠する1989年に刊行された『偶然性・アイロニー・連帯』の提示する「詩人」の概念にホイットマンは援用されていないため、ローティが彼による影響をうけていたかどうかは断言することはできない。しかし、本論文では、両者の思想の親和性を精査することによって、彼らの内的な連関として描きだすことを試みる。
- (2) ローティとデイヴィッドソンの議論における「メタファー」のさらなる諸特徴については Arribas 2007 が詳しい。また、『偶然性・アイロニー・連帯』を中心とする「メタファー」の役割に関して Leypoldt 2008 も参照。
- (3) なお、Malachuk 1999 は、ローティの進歩観がホイットマンに依存していると述べている (Malachuk 1999, 66) が、それ以上の言及はない。しかし、注1で触れたように、『哲学と社会的希望』以降の著作においては、ホイットマンの影響を認めることができる。
- (4) 「ポスト・ダーウィン」とは「新ダーウィン主義」を指すのではなく、ダーウィン以後の思想という意味である。
- (5) ホイットマン研究において、ホイットマンがヘーゲルの「弁証法」に影響を受けていたことは比較的受け入れられているが、一方で、ホイットマンが「弁証法」をそのまま導入しているわけではないと否定する見解もある (Parsons 1943)。
- (6) このホイットマンの表現は、実は最初期から構想されているものである。「かれ [= 詩人] は、かれが手を握る——たしかにしっかりと手を結ぶ人々を、以前には到達されなかった生き生きとした領域へと連れていく。[...] / かれらは、その [生き生きとした] 空間と語りえない輝きが、古びた場所と古びた光を力を失った空虚に変えるのを見るのである」(LG, 25/三三)。また、

こうした「詩人」が民主主義的な宇宙を無限で開かれたもののアナロジーとして用られていること、一方で、その宇宙が一元的な世界観へと収束されているように見えることが指摘されている（Mack 2002,136）。

(7) レイノルズの描いた字義通りのホイットマン解釈への批判的な見解については Frank 2007 を参照。

(8) 筆者の用いる「よりよい未来」という言葉が志向しているものは、ローティにおける「社会的希望」の概念に相当している。それは、「グローバルでコスモポリタンの、民主主義的・平等主義的な、階級も身分もない社会への希望」（PSH,xii/一）である。しかし、とりわけ政治的問題をめぐるこうした「希望」をどのように検討するのかは、別の機会に論じたい。

文献表

一次文献からの引用は、対応する文献の末尾に記した略号の後に頁数を記す（例：FP,6）。訳出に関しては既訳を参照したうえ筆者の責任により訳文を変更している。その場合には、原著頁数の後に邦訳頁数を記す（例：CIS,18/四一）。また、引用文〔…〕は省略、[] 内は筆者による補足を表す。

〈一次文献〉

□リチャード・ローティ

[CIS] : Richard Rorty, 1989, *Contingency, Irony, and Solidarity*, Cambridge University Press. (『偶然性・アイロニー・連帯』齋藤純一ら訳、岩波書店、2000 年)

[FP] : —, 1990, “*Feminism and Pragmatism*”, The Tanner Lectures on Human Values.

[EHP] : —, 1991, *Essays on Heidegger and others: Philosophical Papers vol.2*, Cambridge University Press.

[ORT] : —, 1991, *Objectivity Relativism and Truth, Philosophical Papers vol.*, Cambridge University Press.

[AOC] : —, 1998, *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-century America*, Harvard University Press. (『アメリカ未完のプロジェクト——20 世紀アメリカにおける左翼思想』小澤照彦訳、晃洋書房、2000 年)

[PSH] : —, 1999, *Philosophy and Social Hope*, Penguin. (『リベラル・ユートピアという希望』須藤訓任ら訳、岩波書店、2002 年)

[PCP] : —, 2007, *Philosophy as Cultural Politics: Philosophical Papers*

Vol.4, Cambridge University Press. (『文化政治としての哲学』 富田恭彦ら訳、岩波書店、2011 年)

□ウォルト・ホイットマン

[LG]: Walt Whitman, 2005[1855], *Leaves Of Grass The First(1855) Edition.by Halord Bloom*, Penguin Classics Deluxe Edition.(『草の葉 初版』 富山英俊訳、みすず書房、2013 年)

[DV]: —, 2010[1871], *Democratic Vistas*, Edited By Ed Folsom, University of Iowa Press.

[PP]: —, 1982, *Walt Whitman: Poetry and Prose, Literary of America*.

〈二次文献〉

Olieve Wrenchel Parsons, 1943, “*Whitman The Non-Hegelian*”, Cambridge University Press, PMLA Vol.58 No.4, 1073-1093.

Richard Bernstein, 1990, “*Rorty’s Liberal Utopia*”, Social Research Vol.57 No.1.

David Reynolds, 1996, *Walt Whitman’s America: A Cultural Biography*, Random House.

Daniel Malachuk, 1999, “*Walt Whitman and the Culture of Pragmatism*”, Walt Whitman Quarterly Review Vol.17 No.1.

Stephen John Mack, 2002, *The Pragmatic Whitman: Reimagining American Democracy*, University of Iowa Press.

Colin Koopman, 2006, “*Pragmatism as a Philosophy of Hope: Emerson, James, Dewey, Rorty.*”, The Journal of Speculative Philosophy, New Series, Vol.20, No.2.

Jason Frank, 2007, “*Aesthetic Democracy: Walt Whitman and the Poetry of the People*”, The Review of Politics 69,402-430.

Sonia Arribas, 2007, “*The Call of Metaphor: Richard Rorty’s Politics of Language, LOGOS*”. Anales del Seminario de Metafisica Vol.40.305-328.

Günter Leypoldt, 2008, “*Uses of Metaphor: Richard Rorty’s Literary Criticism and the Poetics of World-Making*”, New Literary History, 39: 145-163.